

II-C-3 多彩な分裂病様症状と脳波所見を示した一症例について

近畿大学医学部 精神神経科

○下和田 英洋・大里 収・安慶名 泰通
土居 一之・花田 雅憲

われわれは、長期にわたり多彩な精神症状を示し、それに伴って、種々の脳波所見が認められ、急性肝炎罹患時の繰り返す脱力発作を契機に著明な精神症状の改善がみられた症例を経験したので報告し、精神症状と脳波所見の相関について検討する。

症例：30才、女。

昭和47年3月（18才）の高校卒業の頃、被害関係妄想で発症し、8月に昏迷状態に陥ったが、1ヶ月程で軽快した。48年8月より徘徊・精神運動性興奮・幻覚妄想がみられ、某病院に入院した。1年程で軽快したが50年7月幻覚妄想がみられ当科を初診。その後、徘徊・衝動性・精神運動性興奮・幻覚妄想を伴う緊張病様状態や軽躁状態に陥るたびに3回程入院を繰り返した。その後安定していたが、56年1月より再び緊張病様状態となり、4月より当科に入院した。この状態は2年半にわたって持続したが、昭和58年6月急性肝炎に罹患し、GOT・GPTが2,000以上を示す状態のなかで、繰り返す脱力発作がみられ、それを契機に幻覚妄想・精神運動性興奮等の症状が消失するなど精神症状が著明に改善した。その後、軽躁状態や睡眠障害は残存しているが、幻覚妄想や精神運動性興奮等はみられていない。

脳波と精神症状の相関をみると、軽躁状態の時の脳波は最も安定しており、基礎律動は約8 Hzの α 波が規則的にみられ、発作波や徐波はみられなかった。緊張病様状態になると、当初は脳波はほぼ正常範囲内の所見であるが、徐々に悪化し、高振幅徐波が頻回にみられた。そして、棘波・棘徐波複合などの発作波も認められ、基礎律動も6～7 Hzまで徐波化した。緊張病様状態が徐々に改善してゆく時期には、脳波も改善し、徐波・発作波は減少し、基礎律動も7.5～9 Hzと速波化した。

II-C-4 Bear & Fedioの質問紙の感受性と特異性の検討 — 側頭葉てんかん患者と機能性精神病患者の性格特徴の比較を通して

1) 都立松沢病院
2) 東京大学医学部精神医学教室
土井永史¹⁾ 丹羽真一²⁾ 安西信雄²⁾
亀山知道²⁾ 斎藤治²⁾ 増井寛治²⁾

目的 側頭葉てんかん患者の性格特徴の評価におけるBear & Fedioの質問紙の感受性と特異性を調べる。

方法 以下に示す患者群を対象にBear & Fedioの質問紙を施行し、性格特徴評価点の各群間の比較、性格特徴評価点による各群の判別分析を行ない、同質問紙の特異性と感受性とを調べた。対象は東大病院精神神経科外来に通院中の患者のうち、複雑部分発作を持ち、側頭部優位の発作波焦点を示す側頭葉てんかん患者33名（T群）、精神分裂病患者30名（S群）、感情病患者29名（A群；このうち24名がうつ状態、5名がそう状態）である。ただし、S群およびA群の診断はDSM-IIIに基づいて行った。各群の性比、教育年数に有意差はなかったが、平均年齢はA群が他の群より有意に高かった。

結果 1) この質問紙で評価される18の性格特徴のうち、T群と他の2群のうち少なくとも一方との間で評価点に有意差のあった性格特徴は、自己評価では＜受動性＞（ $T < S$ ）＜抑うつ＞（ $T < A$ ）の2特徴、観察者の評価では＜正義感＞、＜攻撃性＞、＜多幸感＞（いずれも $T > S$ ）の3特徴であった。

2) 18の性格特徴評価点を変数とする3群の判別分析の正判別率、T群判別の感受性（正判別されたT群の人数／T群の人数）、T群判別の特異性（正判別されたT群の人数／T群と判別された人数）は、自己評価では、それぞれ66.3%、66.7%、62.9%、観察者の評価では、それぞれ66.3%、72.7%、64.9%であった。

考察 以上の結果は、この質問紙が側頭葉てんかん患者の性格特徴評価において、ある程度の感受性と特異性を持っていること、また自己評価より観察者の評価の方がこの2点について優れていることを示しているものと考えられる。